

2022年9月4日（日）主日朝礼拝説教

『万物は神から出て神に帰る』 井上隆晶牧師

I コリント 8 章 4～6 節、マタイ福音書 5 章 33～37 節

①【誓約は、人間が不誠実であることのしるし】

人間は生き物のうちで唯一「言葉」がしゃべられる生き物です。それは人が神に似せて造られたからですが、人間自体の中に罪があるので、出てくる「言葉」はまことにいい加減であり「言葉」を非常に軽く用いてしまいます。そこで「誓約」というものが現れてくるのです。自分の約束した言葉をいつも必ず果たしていれば「誓約」などは必要ありません。誓約は、人間が不誠実であることのしるしなのです。「誓約文」「誓約書」などは、自分の約束した言葉は真実であることと、それを相手に信じてもらえるための保証人とか罰則などが書かれています。そこで信頼できる人や、神様などが保証人として呼び出されるのです。また「誓約」が聖なるものであることを強調する為に儀式も生まれました。手を天に挙げるとか、聖書の上に手を載せるとか、動物を犠牲にしてその間を歩くとかです。何にでも「誓約」を付けるようになると、何度も神様の名前を持ち出すことになり、神様を利用することになります。そこでユダヤ人たちは神様の名前を持ち出した時は、誓いは守らなければならないが、「天、地、エルサレム」とかの名によって誓った時は、破っても良いと都合よく解釈していました。ユダヤ人だけではありません。私たちが子どもの頃から「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ます！指切った。」と誓約をすることを覚えますが、針千本飲んだ人を見たことがありません。誓約は簡単に破れることを遊びながら覚えているのです。それに対してイエス様は、天は神の玉座、地は神の足台、エルサレムは神の都（マタイ 5：35）であるといわれます。これはイザヤ書の「天はわたしの王座、地はわが足台。あなたはどこに私のために神殿を建てうるか。」（イザヤ 66：1）からの引用です。天も地も神がそこに満ちておられる場ですから、天や地にかけて誓うことは神にかけて誓うことと同じではないか、だから「一切誓いを立ててはならない」といわれました。

ここで言いたいことは何かというと、人間は誓いを立てられるほど確かな者ではないということです。自分の髪の毛一本でさえ、黒くも白くもできないからです。自分さえもコントロールできないのです。アブラハムは神様と契約を結ぶ時、居眠りしてしまい、その間に神様が一方的に約束を結びました。人間は約束を守れない者なのです。約束を必ず守られるのは神のみです。何年経とうと、何千年経とうと、誓ったことは必ず果たす、これが神です。だから人間にできることは「はい、いいえ」つまり「イエスカノー」かだけだということです。それ以上は悪い者（悪魔）から出るので。神だけが最も確かなお方です。人間は確かではないの

です。私はここでイエス様が「**天は神の玉座、地は神の足台**」と言われた言葉が心に響きました。神は天の玉座に座り、この地に足をしっかりと置いて支配しておられます。私たちは神の支配の中を生活しているのです。

②【万物は神から出て神に帰る】

パウロという人はこの世界の中に神を見れる人でした。今日の個所では「**私たちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出て、私たちはこの神へ帰って行くのです。**」（I コリント 8 : 6）と語ります。同じような表現は他の手紙の中にも見られます。「**すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。**」（ローマ 11 : 36）、さらに「**すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上にあり、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられます。**」（エフェソ 4 : 5~6）と語ります。万物は神によって創られました。また神は万物を通して今日も働いておられ、万物の内におられる、というのです。だからすべてのものには神の御手が加わっており、神と関係なく存在しているものは何一つないのです。しかもその存在を保持しているのも神です。「**あなたのご自分の息（聖霊）を送って彼らを創造し、地の面を新たにされる。**」（詩編 104 : 28）とあるからです。神の聖霊の働きによって万物は生き新しくなります。だから神とつながっていないものは何一つないのです。神はこの世界の中に満ち満ちておられるのです。

●信仰深かったと伝えられる英国のアン女王の祈りに「**あなたの御力に従えない大いなる出来事はなく、あなたの守りを必要としない小さいこともない**」というのがあります。

では「**私たちはこの神へ帰って行く**」とか「**すべてのものは、神に向かっているのです**」とはどういう意味でしょう。詩編 90 : 3 に「**あなたは人を塵に返し、人の子よ、帰れ、と仰せになります。**」とあります。人が死に土に返るのは、神の元に帰ることです。人は神の元からこの世に使命を帯びてやってきて、神の仕事が終わったら神の元に帰るのです。人の人生は神に向かうためにあり、実際、知らない内に神に向かっているのです。人生の終わりに神に帰るだけでなく、血液が心臓に帰ると新しくなってまた送り出されるように、私たちは日毎に、七日毎に神キリストの教会に帰り、新しくなってこの世に送り出されるのです。

③【キリストによって私たちは神に帰る】

ただ人間は自分の力では神の元に帰ることができません。そこで神と人との仲介者として神の子キリストがやってきたのです。神から来た者だけが神へ帰ることが出来、同時に人となった者だけが人と手をつなげるからです。キリストはザアカイに向かって「**私は失われたものを捜して救うために来た**」（ルカ 19 : 10）といわれました。キリストは神に帰れない人を見つけ出しては、罪を赦し、死を取り除き、神の元に連れ帰られます。私たちがこのようにして教会に来れたのは主が見つけ出し、呼んでくださったからです。キリストは私たちを見つけて、罪を

洗い、花嫁として肩に担ぎ、天の父なる神の元へ連れて行ってくださるのです。ゆえに神と人を結び付けるのはキリストのみです。彼が神と人の間にいれば、神と人との関係が回復するでしょう。人と人の間にいれば、人間関係が回復するでしょう。キリストこそ万物を一つに集め、一つにしてゆく力であり、その鍵です。そのためキリストは聖餐を定められました。パンとぶどう酒の形で人の中に入り、すべての人を一人の人に再創造するためです。だから人からも、この世からもキリストが去れば、万物はバラバラになり、崩壊するでしょう。しかしキリストはこの世を見捨てられません。世の終わりまであなたがたと共にいると言われ、この世を自ら受け取られたからです。それが受肉です。キリストはご自分の中で天と地を一つにし、神と人を結ばれ、一体にされました。その結びつきは永遠であり、解かれることはありません。ゆえにこの世、万物は変容しながら永続するでしょう。

●榎本保郎牧師のある体験談が本の中にのっていました。「私は何年前でありましたが、和歌山の丸の内教会という教会の新年聖会に行きましたら尾鼻牧師が「先生、今、ちょっと暇なんですけれど、一人の人、見舞うてくれませんか」と言うんで「喜んで行きます」と言って、行ったんです。その訪ねて行ったお家は小さなハンコ屋さんでした。このハンコ屋さんは、夫婦共に聴力障害なんです。その家の、その聴力障害のご主人のお姉さんが、肺結核で寝ていらっしやっした。その人を見舞いに行ったわけです。それで行ってみて私、驚いたんです。ベニヤ板を張り巡らしたみたいな所で、吹いてくる風が隙間からヒューヒューと入って来るんです。本当に寒い部屋で、肺切除の手術も出来なくて、死を待っているんです。耳は聞こえないし、栄養不良でね、そういう余り豊かではないお家にやっかいになっているんですからね。気の毒だなと思いました。何とか慰めてあげようなんて傲慢に私は思ったら、その方が私に鉛筆で小さなメモに書いてくれたんです。もう、細い細い、見えないような字でした。何と書いてあるかという『すべては感謝』。私は打たれましたね。この言葉には、本当に。私は恥ずかしかった、本当に。『すべては感謝』。その言葉には重みがありますね。言葉は少ないのですけれども、本当に、私の魂を圧倒してくるような力がある。…ブツブツ言って蟹みたいにアワばかり吹いて不平と不満ばかり言っていたのに、今、牧師さんが来たから書かないかんとって『すべては感謝』と書いても、そんなもんに響いてきませんね。だけど、この人は本当にイエス・キリストにあって『すべては感謝』していたんです。だから、それが私に響いて来たわけでしょう。

イエス・キリストにあって『すべてを感謝』できるこの人は、神の恵み、キリストの恵みがはっきりと見えていたということです。すごいですね。

先週K牧師は、牢の中に入れられても、パウロが喜ぶことができた秘訣は「主はすぐ近くにおられる」(フィリピ4:5)ことを信じていたからだと言われました。キリストが自分を愛し、自分の中におられ、自分と一体であることが分かることほど、勇気と平安と希望を与えるものはありません。この世界の中に満ち満ちて

支配しておられる神に感謝します。この世界を見捨てず、御自分と一体にし、今日も働いておられるキリストに感謝しましょう。